

# 『いかにして特産人を作るか』

伊方町地域おこし協力隊  
楠本 博貴



はじめに

平成29年12月1日より伊方町の地域おこし協力隊として活動しています。講座が終わる頃には着任してから約1年が経過しますが、この文章を書いている現時点では協力隊として地域の要望を十分拾えているとは言えない状況です。活動する中で悩むことも多いのですが、何か問題解決の糸口でも見つけられればと思います。講座に参加させていただいた次第です。

## 講座を通じて学んだこと

初回の現場視察では別子銅山跡を新居浜南高校ユネスコ部の部員がガイド役として案内するという取り組みを見せていただきました。高校生が加わると地域振興や産官学の連携事業に若い世代の視点が入るので効果的であると思います。また、ユネスコ部が募っている別子銅山ガイドブック作成のクラウドファンディングでは期限を待たずして目標金額を達成している状況でした。クラウドファンディングを利用することは、現在の取り組みが一般的に支持を得られているのか

の目安にできそうなので、とても効果的な手段であると感じました。

当日の講座はいかに持続可能なかたちで将来性のある取り組みができるかという点が主題で、文部科学省が推奨しているESD (Education for Sustainable Development) Ⅱ「持続可能な開発のための教育」に則ったものでした。銅の採掘という二次産業から三次産業である観光業へと移行している別子銅山は持続可能な産業の可能性を探る上では非常に良い舞台であると思いました。沢山の人が自身の周囲にある物や人に興味を持ち、個性や価値を認めることによって集団としての多様性を持つことが、変化に対する柔軟性を生み、長期にわたり産業価値を持続させるヒントになると考えます。

身近にあるものに価値を見出すことは、どの地域振興においても焦点となることが多く、上手くいけば自身の故郷への帰属意識が生まれ、過疎化や人口流出への対策の一助となる可能性は高いと考えます。ただ、地域おこし協力隊になる人間は故郷に対する帰属意識が薄い場合が多いと個人的には考えています(帰属意識が薄いので他の地域に行き活動しようと考えてる)。よって故郷を離れて活動する

地域おこし協力隊がより地域に密着して成果を出すには、活動する場所の地元の人々としつかり絡んでこそ成果に繋がるのではないかと感じました。

二回目と三回目の現場視察は郡中と三津の町でのまち歩きでした。これまでまち歩きの経験がほとんどなかったのですが、貴重な体験ができて良かったです。二回続けてのまち歩きでしたが、どちらも歴史のある建物が保存されており、共通点が多く見られました。ただ、今回の視察に限って言えば、郡中は割と長いスパンでの移住定住対策や地域振興を計画しており、三津は近い将来へ重点を置いて行動をしているように感じました。同じまち歩きの視察でも受ける印象が異なった点は興味深かったです。

## 講座で学んだことを踏まえて、これから取り組みたいこと

今回講座に参加することで沢山の場所を見て、人に会い、話を聞いて感じることも多かったのですが、やはり一番重要なのは人であるということを再認識しました。私が幼い頃から地域振興の話には特産品という単語がセットのように頻繁